

学校教育目標	心豊かで、未来を切り拓くための実践力をもつ児童の育成
《本年度の重点目標》	
《重点目標1》	確かな学力、健やかな体、豊かな心の調和のとれた子どもの育成を推進する。
《重点目標2》	教育環境を整え、安全で安心な学校づくりを推進する。
《重点目標3》	家庭・地域と連携し、地域のよさを実感する子どもの育成及び開かれた学校づくりを推進する。

◆記入にあたっての留意事項

- 取組については、各学校の重点目標達成のための方策に応じて設定すること。
- 「取組」「評価項目」「評価項目についての重点的取組」を設定する際には、次の6点をいずれかに必ず位置づけること。
 - ①学力向上に関する取組
 - ②体力向上に関する取組
 - ③心の育ちに関する取組
 - ④いじめ問題解決に関する取組
 - ⑤特別支援教育推進に関する取組
 - ⑥あいさつ日本一に関する取組
- 小・中学校においては、①学力向上に関する取組、②体力向上に関する取組、③心の育ちに関する取組の部分の記述について、スクールプランと整合性を取ることを。
- 評価の例 A…目標を十分に達成できた B…目標をほぼ達成できた C…あと少しで目標が達成できた D…目標達成までいかなかった

取組	評価項目	評価項目についての重点的取組	評価	○成果と◆次年度の改善点
学力向上に関する取組	【授業改善①】 ◇「授業の最後に学習活動を振り返る活動をよく行った。」について肯定的な回答をした児童の割合 [100%] 【授業改善②】 ◇「授業で学んだことを、ほかの学習や普段の生活に生かしている。」について肯定的な回答した児童の割合 [80%以上]	○学びの基礎として、学習スタイルのスタンダード化を図る。 ・教師のみならず、児童自ら、一単位の時間の中で、めあて・まとめ・ふりかえりの記述が習慣化するよう、全学年統一の「ノート作りの形式」を作成する。文字の色など基本的なルールを決めることにより、児童が迷わず、スムーズに学習に取り組むことができるようにする。 ・学習に集中できる環境づくりとして、学習に必要な物だけを机の上に出すため「そねっとケース」を使用する。 ○「深い学び」を自覚するための時間の確保 ・一単位時間の終わり(最低3分間)は、ふりかえりの時間として位置づけ、自己の学びを児童自身が自覚できるようにする。 ○主題研究における取組を全教科に広げていく。 ・主題研究で、話し合いを活発化させるための一方法として、「思考ツールを活用した授業づくり」の研究を行い、それを国語科、社会科等の授業においても活用する。	B	○「授業の最後に学習活動を振り返る活動をよく行った。」について肯定的な回答をした児童は92%となり、目標100%に8%及ばなかったものの1学期より11%上昇した。ふり返りの視点を示したことにより、児童自ら、ふり返りに取り組むようになり、習慣化した。また、そのことで、ふり返りの時間も短い時間でもできるようになってきた。「深い学び」にもつながり、質も上がってきた。 ○学習スタイルのスタンダード化が定着し、めあて、まとめに加えふり返りの記述も習慣化した。 ◆国語科の「ノート作りの形式」を作成する。 ○「授業で学んだことを、ほかの学習や普段の生活に生かしている。」について肯定的な回答した児童は87%で、1学期より4%上昇し目標を達成した。 ◆思考の視覚化で、ホワイトボードや思考ツール(スキル)の活用が、上学年を中心に行うことができるようになった。他教科での活用へもっと広げられるようにしていく。 ◆そねっとケースの使用については、手づくりのため、強度等にも問題があり、使用が徹底できないところがある。学習に集中できる環境づくりの取組としての効果がどうであるか、再考する。
	【補充学習】 ◇「先生は、授業やテストでまちがったところや理解していないところについて分かるまで教えてくれる。」について肯定的な回答した児童の割合 [90%以上]	○学力向上のための特設時間の充実と徹底に取り組む。 ・朝の活動として始業前の15分間(8:35~8:50)の確実な確保を行う。火曜日(読書タイム)水曜日(国語タイム)金曜日(算数タイム)、「読書日記」「音読計算」「漢字フラッシュカード」に関しては、全校児童共通で取り組む。計算と漢字に関しては、始業時の2分間にも取り組む。算数タイム、国語タイムでは、「CRTアシストシート」[活用する力を高めるワーク]「基礎・基本問題集」に主に取り組み、朝の活動時間の中で答え合わせと解説を行う。 ・1,2年は月・水・金の朝の活動に「MIM」に取り組む。 ・3年~6年は、朝の活動に「学力定着サポートシステム」を組み込む。	B	◆「先生は、授業やテストでまちがったところや理解していないところについて分かるまで教えてくれる。」について肯定的な回答した児童は、87%であり、目標には3%及ばなかった。 ○国語タイムでは「読書ワークシート通信」で新聞記事を使用した問題、算数タイムでは活用力を高める問題を、教務で選択、印刷し取り組み、活用力を養った。 ◆○「漢字フラッシュカード」「音読計算」については、学級によって取組に差がある。「音読計算」については、児童だけで取り組むことができるようにした結果、計算力が伸びた学年もあったので、児童主体で行えるよう引き続き指導を行っていく。 ◆「学力サポートシステム」の活用が十分にできていない。効果的な使用について、他校の取組等を参考にしたり、委員会からのサポートを受けたりすることを視野に入れて再考する。 ○4,5年の学期末に「学力向上がんばりプログラム」に全職員で取り組み、4年生に関しては算数科における基礎力を、5年生に関しては算数科と国語科における活用力を養った。
	【家庭学習】 ◇「児童質問紙(14) > 「学校の授業時間以外に、普段(月曜日~金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」について、学年設定目標時間以上行っている児童の割合 [80%以上]	○家庭学習のスタンダード化を図る。 ・「家庭学習チャレンジハンドブック」を活用し、家庭学習への取組の協力を、保護者会や通信等で行う。 ・自主学習ノート「そねっとノート」に全学級統一して取り組む。共通の表紙を作成してノートに添付し、取り組んだ冊数により表紙を変えていくことで、児童の自主学習への意欲を高める。ノートには、必ず「日付・めあて・ふりかえり」を記載するように指導する。担任のみの評価にとどまらず、参考となるよいノートは展示し、全校児童に啓発する。	C	○「そねっとノート」の取組は、おむね児童の家庭学習への意欲を高めるのに効果的であった。 ○低学年における「そねっとノート」への取組に効果が表れており、多くの児童で家庭で学習する習慣が身に着いてきている。 ◆質問紙(14)で学年設定目標時間以上行っている児童は69%であり、家庭での学習が定着していない児童が多い。 ◆「そねっとノート」への取組に学年差、個人差がある。習慣化するまでは、児童の自主性に任せるのではなく、宿題として取り組ませるなどの工夫が必要である。 ◆家庭での協力が大きい取組であるため、啓発をさらにしていく。
体力向上に関する取組	【授業改善①】 ◇「授業の最後に学習活動を振り返る活動をよく行った。」について肯定的な回答をした児童の割合 [100%] 【授業改善②】 ◇「授業の始めに、体力アップのための取組をよく行った。」について肯定的な回答した児童の割合 [100%]	○ホワイトボードを活用し、毎時の学習のめあてを、必ず児童に示すようにする。また、一単位時間の終わり(3分間)は、ふりかえりの時間として位置づける。 ○自分の課題解決のための場を選択できるようにするため、多様な活動の場を設定する。また、25分以上の運動量を確保する。 ○昨年度課題となった種目への対策として、毎時間の授業の始めに「ジャンプアップ運動」「パービー運動」に取り組む。また、「フォームロケット」を使った運動にも定期的に取り組む。 ○「新体力テスト」の個人結果を6年間記録するカードを作成し、今年度の目標記録を設定するとともに、自分の伸びを自覚できるようにすることで、個々の動きとなるようにする。	B	○「授業の最後に学習活動を振り返る活動をよく行った。」について肯定的な回答をした児童は92%となり、目標100%に8%及ばなかったものの1学期より11%上昇した。今後は、体育科においても、ふり返りの視点を活かせるようにする。 ○「ジャンプアップ運動」「パービー運動」への取組は、定着し、児童のアンケートでしっかり取り組んだと答えた児童は、96%であった。 ◆小黒板を活用しての学習活動を行うことは、難しい状況にある。他校の取組等も参考にし、活用できるようにしていく。
	【運動習慣】 ◇体育委員会の児童を中心に行う「そねっと元気はつらつタイム」(一校一取組)を、年間を通して継続的に実施すること。その取組の回数の割合 (90%以上)	○体育委員会の児童を中心に、毎週水曜日の中休み15分間に「そねっと元気はつらつタイム」を行う。同一の取組にならないよう、キッズダンス、なわとび、持久走など、多様な運動に取り組むようにする。全児童に参加を呼び掛けることで、運動が好きな児童の育成を図る。 ○毎日体を動かすことが習慣化するよう、児童に「体力アップシート」への記入を6校時(5校時)終了後に、確実に行わせる。また、担任が毎週金曜日にシートのチェックをする。	B	○「そねっと元気はつらつタイム」の毎週水曜日の実施を確実に行うことができた。児童のアンケートで進んで参加したと答えた児童は91%となり、目標を達成した。 ◆「体力アップシート」の活用で、思ったように児童の体力アップを図っていくことができていない状況にある。他校等の取組等も参考にし、さらなる体力アップを図っていく必要がある。
心の育ちに関する取組	【授業改善①(道徳)】 ◇児童質問紙(6)「自分には、よいところがあると思いますか」について肯定的な回答をした児童の割合 [90%以上]	○授業の中で、小グループなどで話し合い、一人一人が自分の考えを述べて互いに聞き合うという学習形態を積極的に取り入れることにより、自分が仲間から受容されているという学級の雰囲気作りを行う。そのことで、学級への所属感を高め、自尊感情へとつなげていくことができるようにする。 ○「子どももつながりプログラム」を系統的に行い、児童のコミュニケーション能力を高める。	B	○ヘアーグループ→全体と、スモールステップでの話し合い形式が、どの学級でも自然に行われるようになってきた。自分の考えを話したり、他の考えを聞いたりする姿勢が育ってきた。 ◆児童質問紙(6)「自分には、よいところがあると思いますか」について肯定的な回答をした児童は、85%であり、1学期より2%上昇したが、目標には5%及ばなかった。 ○◆コミュニケーション能力を高めるために、「子どももつながりプログラム」を計画的に実施するように計画したが、実施が難しい学年があった。年間6時間以上実施するように計画を見直す。
	【授業改善②(特別活動)】 ◇上記と同様、児童質問紙(6)において肯定的な回答をした児童の割合 [90%以上] ◇児童質問紙(5)「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦していますか」について肯定的な回答をした児童の割合 [90%以上]	○昨年度行った計画委員会による「あったか言葉ポスト」「あいさつ運動」に、今年度も継続して取り組み、仲間の良さを積極的に伝えることができるようになる。 ○委員会による縦割り集団による「どろんこ集会~生き物ウォークラリー」「みんなで遊ぼう」「大縄跳び練習」に今年度も継続して取り組む。また、体育委員会と連携して、大縄の練習を「そねっと元気はつらつタイム」の中でも行うようにする。異年齢集団が共に協力して何かに挑戦し、達成できる喜びの場を設定し、有用感を高めさせるとともに、他者も大切にすることのできる児童の育成を図る。	B	○質問紙(6)で肯定的な回答をした児童は85%であり、目標には5%及ばなかったが、一学期よりアップし、ほぼ目標達成と言える。 ○高学年においては、学校行事や委員会活動を通して、達成感や充実感を味わうことができている児童が多い。 ◆難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦したと肯定的に回答している児童は、85%であり、目標には、5%及ばなかったが、毎学期伸びている。 ◆自尊感情をさらに高めるため、達成感、有用感が感じられる行事における、各々のめあての設定と取組後のふりかえりの設定、および教師の評価を引き続き大事に丁寧に行う。
	【いじめ防止】 ◇いじめの早期発見、早期解決を図るための体制づくりと職員の間での共通理解 ◇「あいさつを自分から進んでした」について肯定的な回答をした児童の割合 [90%以上]	○月1回の確実な生徒指導部会、生活アンケートの実施、面談を実施し校内で共有するとともに、早期発見に努める。また、「機先を制する」生徒指導を徹底する。 ○計画委員会が中心となって「いじめ防止」のための取組を呼びかけたり、いじめ撲滅宣言を周知したりする。	A	○◆「あいさつを自分から進んでした」について肯定的な回答をした児童は86%であり、2%上昇したものの目標には4%及ばなかった。あいさつポスターコンクールを開催したり、家庭や校区等に児童作成のあいさつ啓発の手紙を配付したりして、校区全体であいさつ運動に取り組んだ。その結果、地域からも、「あいさつする子どもが増えた。」という言葉が聞かれるようになった。 ○縦割り集団の活動を通して、上級生は学校全体を動かす要の役割を自覚し、低学年は、上級生への憧れなどの気持ちをもつことができた。 ○児童に対するアンケートを定期的に実施し、いじめ等が発生していないかを細かくチェックすることで学級内で起こっていることを捉えることができた。また、身体等についても悩んでいることがないかを捉えるように心がけた。今後も継続して行う。 ○OJTの中で問題事象等に対応し、教職員が生徒指導対応能力をつけることができた。
安心・安心・相安全	【特別支援教育】 ○インクルーシブ教育の視点を踏まえた特別支援教育の研修の充実 ○個に応じた特別支援教育推進体制づくり	○特別に配慮を要する子どもについて共通理解を図る研修会を定期的に行う。また、必要に応じて個別のケース会議を開く。特別支援コーディネーターの役割を明確にし、組織の充実を図る。 ○特別支援学級との交流学習については、児童の実態に合わせて計画的に実施する。 ○特別に配慮を要する子どもへの支援体制(スクールカウンセラーの活用、教育相談活動の充実、SSWの活用)を計画的に行う。 ○学童保育クラブとの連携を図り、情報交換会を行う。	A	○特別支援教育コーディネーターが中心となり、個別の支援計画をもとに指導・助言していく校内委員会が組織的に機能した。今後も、計画的に研修会等を実施し、子どものことを常に語り合える職員集団づくりを目指していく。 ○特別に配慮を要する子どもについての情報の共有化と支援体制の確立が強化された。 ○特別支援学級の啓発授業を今年度初めて実施し、職員研修が深まった。また、学校便り等で保護者に対しても啓発できた。 ◆交流学習を通して、仲間意識と思いやりの心を育てる特別支援教育のさらなる充実を図っていく。
	【安全・安心】 安全指導の徹底や保護者・地域との連携、安全点検の充実等を通して、安全・安心な学校をつくる。	○火災だけでなく竜巻や津波を想定した避難訓練を行い、安全対応能力の向上を図る。 ○通学路の安全点検し、「スクールヘルパー」「民生委員」「ふれあいネットワーク」「見守り隊」などの協力を得て、連携して子どもの登下校の安全を図る。	A	○メール配信システム「いっせいくん」を活用して、風水害等だけでなく学校からの情報を配信した。来年度も、児童の安心・安全な生活を守るために、「ふれあいネットワーク」や「見守り安全隊」等の地域の方々との連携を徹底する。 ○通年、実施している避難訓練に加えて、今年度は休み時間帯の避難訓練を実施することができた。 ○登校班会議を中心に登下校の安全についての考えさせ、常に安全について意識をもたせることができた。 ◆災害時を想定した、保護者への引き渡し訓練も次年度以降検討したい。
開かれた学校づくり	【開かれた学校づくり】 ○保護者、地域と情報を共有し、連携を推進する。	○委員会が中心となり毎月0の付く日のあいさつ運動に全校で取り組む。 ○スクールヘルパーや見守り隊に方々に協力を要請し、登下校時の子どもにあいさつや声かけをしていただく。 ○学年・学校通信、学校ホームページを通して情報発信を行う。 ○授業参観や学習発表会、学校開放週間を通して、情報発信を行う。 ○地域の行事や祭りなどへの積極的な参加を促す。	A	○学校通信により、教育活動について情報発信を行うとともに、学校の教育方針を伝えることができた。 ○生活科や社会科、総合的な学習の時間等に積極的に地域の方に来校していただき、交流を行うとともに、学校の様子を知っていただいた。(1年昔あそび 2年まちたんけん 3年大浜池の学習、七輪体験 神幸祭の話 5年曾根干潟等の取材 6年地域環境フォーラム) ○まちづくり協議会等に校長が参加し、地域と情報を共有できた。 ○学校開放週間には、多くの保護者、地域の方の参観があり、学校の活動を見ながら学校教育を理解していただく機会となった。 ◆今後も学校の様子だけではなく、方針やねらいが伝わるように努め、開かれた教育課程を目指す。